

資 料

1707宝永津波のため山内村全村流亡*

中 村 重 久**

The 1707 Hōei tsunami washed out Yamauchi Village*

Shigehisa NAKAMURA**

Abstract: A survey has been undertaken in order to realize what is written in the historical descriptions concerning the 1707 Hōei tsunami which washed out completely a village. The Village "Yamauchi" has a coast facing the northwestern Pacific so that the tsunamis in 1854 and 1946 hit there as in 1707, though protection works have been ready to expected hazards by tsunamis and storm surges. Notes are for Hanida and Higashi-Iwashiro areas in relation to the tsunamis, just neighbouring Yamauchi in Minabe of Wakayama.

1. 緒 言

著者は、これまで、とくに南海道沖巨大地震による被害でも、津波について調査をしてきた(たとえば、中村, 1984 a, b, 1985, 1986, 1987 a, b)。これは問題を局地的なものに限ることを意図したわけではない。津波の実態をひろい視野にたつてとらえ、今後の的確な津波の予・警報と対策に資することを究極の目的としている。ただ、現在の科学的資料は上の目的のためにはまだ十分とは言えないと考えられるので、過去にさかのぼって歴史的資料を利用することを余儀なくされているのが現状である。

このような見地から、本文では、1707年宝永の津波によって“日高郡山内村全て流亡”という記述に注目し、山内村の位置と当時の状況をさぐり、今後将来のための参考にするのを考えた。日高町中央公民館長谷口恒一氏の協力により、この山内村が現在の和歌山県日高郡南部市宇山内であることが判明した。しかし、これらの記述は、日高郡誌(1923, 1970)には認められるが、大

本地震史料(田山, 1904)には記されていない。一方、南部町埴田地区ではあまり被害がなかった(浜野, 1962)。ここで、南部町役場の協力を得て南部町管内図(1/2500)および都市計画地図(1/1000)の閲覧をした。また、南部町誌編纂委員会事務局主任の崎山方圓氏により貴重な津波資料写をいただいた。これによって、1707年宝永津波による山内村全村流亡の実態をさぐる手がかりが得られた。なお、南部の津波については、すでに羽鳥(1980)が調査している。本書では羽鳥の記述で十分とみられない部分について、現地踏査および史料収集の成果に立脚して述べることにした。

2. 史料にみられる記述

大正12年編の和歌山県日高郡誌には、

“(統風土記)一山内村、當村の土地低くして川口にあるより宝永四年の大津波に人残らず流失し、年を経てやや古に復したりという。”とある。人数は不明である。この日高郡誌は1970年復刻された。その第7章災異の第1節地震及津波(p. 412)では、

“特に南部川右岸地の被害甚だしく、山内村の如きは怒濤激突の衝に当り、民家悉く流失せしが(一)、左岸の諸部落には鹿島の激浪を遮るありて被害なし(二)。(以下略)”。

別に、埴田区誌(浜野, 1962)があるが、これは日高郡誌より引用されたものである。

また、鹿島神社神官堅田三千穂氏の手記が田辺市図書

* 1988年11月7日受理 Received November 7, 1988

** 京都大学防災研究所附属白浜海象観測所,
〒649-22 和歌山県西牟婁郡白浜町堅田畑崎
Shirahama Oceanographic Observatory, Disaster
Prevention Research Institute, Kyoto University,
Katada-Hatasaki, Shirahama, Wakayama, 649-22
Japan

館所蔵である。これは堅田種知翁（文政十年誕生・明治四十三年五月、八十四才にて逝去）の記述を筆写したものである。その内容目次はつぎのとおりである。

- (1) 巻頭言 堅田三千穂（昭和8年6月）
- (2) 宝永地震津波記 山内重賢記
- (3) 嘉永大地震海嘯記 熊代繁里記
- (4) 嘉永地震津浪私記抄 熊代繁里記
- (5) 嘉永津波記 堅田種知記

これらは日高郡誌に転載されている。しかし、これらは大森房吉の指示のもと山田実が明治37年に編集発行した大日本地震史料（1904）には見あたらない。

羽鳥（1980）は熊代繁里手記を引用して南部の安政津波の状況を簡潔に記しているが、これは日高郡誌（1923）が出版された後に追加された地震津波史料の一部として引用されたものであろう。だが、1988年現在の著者の調査結果とは若干相異するところがある。

堅田三千穂（浜野、1962）の記述で注目すべきは次の一文である。すなわち、“時恰も近畿地方に地変あり地震頻発、而も南紀州と紀伊水道を震源とするもの多く当局と学者、注意を茲に集注して怠らず 驗潮所 地震計を各所に設け防波堤防潮林の設計を急ぐ等奔命日も嘗ならざるものあるは庶人の寒心に備し恐懼なくんばあらず”。このことから、1944年・1946年にさきだって、1933年には南海道地震について調査や対策が進められていたことは確かなことであろう。

ここで、崎山方圓氏の御好意により入手した“玉井形部翁記”と“南海道大地震津浪の記”とについて記しておきたい。

玉井形部翁記 嘉永七甲寅霜月四日五日
大地震津波独物語（抄）

- i) 霜月四日の晴天に（中略）五ツごろ……忽地震ゆりいだし大いに驚……。
- ii) 翌五日も晴天にて……間をおき震動いたし月の入かとおほしき時大なる震どうにて……。
- iii) 南部浦より埴田までの間塩あからざる……。
- vi) 西の方に当りて八王寺の山のさき海のさまにて……夥敷音いたして音度々大稲妻よりいだし……。
- v) 山内は目津坂のあたりに塩来る、千里浦津波潮に少し……。

なお、新福寺住職によれば、玉井形部は当時翠ノ内（ミスノウチ）に居たと言われ、高所にあって冷静に状況を判断できたのであろう。

南海大地震津浪の記（当時の町長の手記）
昭和21年大地震津波の記

i) 昭和21年12月21日午前4時25分暁 晴天大地震ゆる電燈忽ち消ゆ人々悲鳴をあげて家をとびだし大に騒ぐ（二十一日夜明け前なるも朝飯焚付前故火のけなし）大地震ゆること約十分 止むと同時に津波津波との大声を聞く装束をして熊代熊吉前に至ると既に田甫一面の海と化しありて川口にありし船は皆押し流されてソコの道端に打上げられあり下出での人々皆逃げ来り家を案じ寒さにふるえ山内で四ヶ所に焚火して暖を取る その時北の方角の空は絶えずいな光ありその内夜は明け津波引く 最初の津波の高さ一丈五尺引続き五回押し寄せたるも大したることなし。

- ii) 自分は昭和21年10月1日より南部漁業会の留守番したる故を以て濱辺を案じ夜明と同時に朝食も取らず家を出たる、川口繫留中西浅吉の機械船は野取りの田に横はり中内三治の間まで津波いたり、新宅（虎吉）の門先に長さ一尺のいかあり。外川原は鉄道ガードを抜け瓦屋寺島岩吉の門先まで至る 南部川を逆上ること岩鼻・南部橋西詰は橋上に潮満つ 山内田他の浸汐二十五町歩津波の為め大荒廃麦に皆魚耕土押流され移植付まで修理復旧困難なり
- iii) 南部浜の漁船・網船は全部流失し、鹿島付近に流れありて漁民は総出にて水込の船・網船を拾ひありこの日風なく海に穏かにして作業しやすく販売所を見るに裏（浜側）の下敷居浸りあるも屋内に入らず安全なり南部濱の潮嵩防潮護岸まで陸上の被害なくその魚害に驚きたり。
- iv) 山内下出の人は新福寺親戚に千鹿浦の人は法伝寺猪の山に気佐度の人は秋葉社長床に夜具弁当を運び假眠避難したるも津波なく二十四日より各自宅に帰る

ついでながら、現在の南部町東岩代については、“東岩代八幡神社南北朝に遷居 津波ここまで上らず 古来津波来りこまいぬほえて津波去るといふ”と記録がある。

ここに、玉井形部記の音や東岩代のこまいぬほえてという記述が、巨大津波の前駆音でありうるかどうか（たとえば、中村、1986、1988a; NAKAMURA, 1987）現在のところ未だ確認できていない。

いずれにしても、山内は1707年・1854年・1946年の南海道地震で津波の被害をうけていることは明らかである。以下においては、史料などにあらわれた地名など固有名詞のうち、とくに検討にあたって必要と考えられるもののみを確認の上よりどころとする。

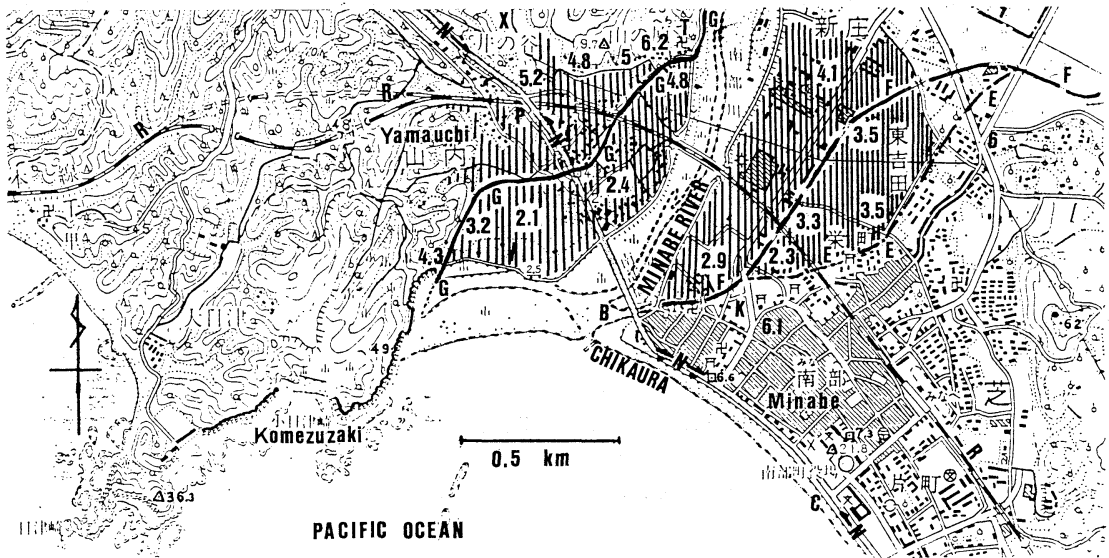


Fig. 1. A cited land map around Yamauchi in Minabe of Wakayama where all of everything was washed out by 1707 Hoei tsunami. Elevation of the ground level referred to D.L. +0.0 m of Minabe. The reference of the ground level T.P. +0.0 m is D.L. +1.5 m. Estimated area where the 1707 tsunami washed out is shown by hatching.

B, river mouth of the Minabe River; C, shoreline just neighbouring the Minabe Town office; K, Minamido area; P, Terayama where the Shimpukuji Temple had been located by ca. 1600; T, the Shimpukuji Temple rebuilt by 1756 and enlarged in 1977; F-F-F, Furukawa before amendment; F-E-E-E-F, Furukawa after amendment; G-G-G, an ancient trace of the Minabe River flow; N-N-N-N, Kisei Rail Line of the JR Nishi-Nippon; R-R-R, Kisei Rail Line of the JR Nishi-Nippon.

3. 1707年の山内村周辺の地形

1707年頃の山内村は現在の和歌山県日高郡南部町字山内に相当するとみてよい。したがって、国土地理院の陸地測量図 (1/50000 および 1/25000) を利用することができる。さらに詳細な微地形については、たとえば、南部町都市計画図 (1/1000) を参考にするとよい。1700年頃から1988年の現在までの歴史的背景を十分考慮すれば、現在利用できる地図から1707年当時の地形や集落をほぼ再現することが可能と考えられる。

ここでは、まず、南部町管内 (1983年現在) のうち山内を中心とした地域を Fig. 1 のように示した (図中の三角点や一等水準点の標高は T.P. を基準としている)。南部町の測量による標高で、本文の内容に関連のある地点のものをゴチック数字 (単位はメートル) で示した。この標高は南部町の工事基準面にもとづいたもので、D.L. で表示し、T.P. = D.L. + 1.5m の関係にある。また、Fig. 1 の図中の記号などは、つぎのように表示した。すなわち、

B: 南部川河口

K: 南道

P: 寺山

T: 新福寺

N-N-N-N: 国道 42 号線

R-R-R: J R 西日本・紀勢本線

G-G-G: 南部川河道跡

F-F-F: 古川 (河道改修後)

F-E-E-E-F: 古川 (河道改修前)

ここで、1988年現在と1707年の間で地盤に隆起・沈降がないものとすれば、その期間にみられた人工的の工作物・構造物などの変化以外について、現在と1707年の地盤高もおよそ同じとみなされる。この点に留意して1707年の津波が山内村に侵入した範囲を推定し、微地形を考慮にいたれた検討の結果を Fig. 1 のハッチングによって示した。

図中、南道のK点付近の標高は D.L. + 6.1m (T.P. + 4.6 m) である。そこには、樹齢 300 年以上の銀杏があり、丹河地藏堂がある。また、K点の東約 150m に三鍋王子跡 (北道王子神社) があり、そこはさらに約 1 m 高

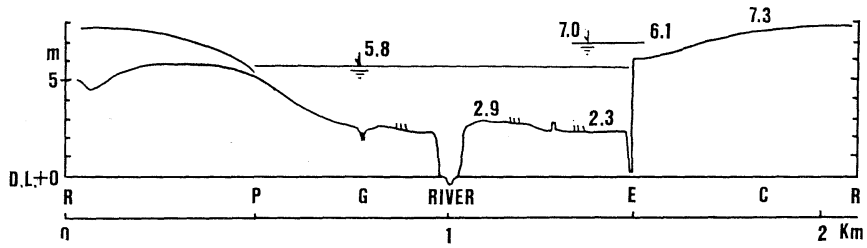


Fig. 2. Topographic profile around Yamauchi along the Kisei Rail Line. Elevation is referred to D.L.+0.0 m (T.P.+1.5 m). Possible highest inundation of the 1707 tsunami around Furukawa (E) must be estimated as D.L.+5.5 m. Possible maximum of the 1707 tsunami inundation must be D.L.+5.8 m (T.P.+4.3 m) in the area east of the Minabe River (from P to G). No effect was found on the highland (for R-P and C-R). Notations are same as in Fig. 1.

くなっている。熊野古道九十九王子のひとつである。そして、K点南西方約150mに勝専寺（開基は室町時代）がある。さらに、K点南西約150mには、羽鳥（1980）の記述にある南道稲荷宮がある。この稲荷宮は1983年に石段などの改装がされている。稲荷宮付近の1等水準点も羽鳥（1980）のFig. 11ではT.P.+5.6mであるが、1983年現在T.P. 6.6mと国土地理院によって改正されている。

かつて1980年に羽鳥が、南部川河口付近は津波の危険度が高いことを指摘しているが、現在では南部川河口B点から海岸線沿いにC点をこえて防波堤が改修補強され、B点では防波堤の天端高はD.L.+10.5m（L.P.+9m）、C点付近はD.L.+9.5m（T.P.+8m）となっている。したがって、千鹿浦とそれに隣接し南部川と古川との合流点に位置する気佐藤（又は気佐度）については防波堤による津波対策は実施されていることになる。

ここで南部町の都市計画図に基き、Fig. 1のJR西日本・紀勢本線沿いに1707年頃の推定地盤高を示したのがFig. 2である。地元の人々の伝承も考えにいと、古川のE点付近で1707年の津波はD.L.+7.0m（T.P.+5.5m）にまで達したものとみられる。

山内村では、Fig. 1のP点（寺山）にあった新福寺が慶長年間（1600年頃）、Fig. 1のT点に移転し現在に至っている。この新福寺は1756年（宝暦6年）本堂再建、安政津波の時には現在の地盤高（D.L.+6.2m位）まで浸水があったといわれている。これからみて、この本堂は1707年に地震によって破壊され、約50年を再建に要したものと推察される。

また、山内村の集落は半農半漁で、海浜に堤防もな

く、住家も海浜に近く、住家も間口2—3間・奥行2—3間程度のもので、数十戸の集まりであったろう（cf. 中村, 1988 b）。この点では、現在防波堤が完備し、住家の構造も全く異つたものと考えねばなるまい。したがって、時代的背景・社会構成・住家の構造など十分考慮にいたした津波対策が今後将来必要となる。

なお、埴田地区はFig. 1のC点南東方約0.5kmに位置し、そこに鹿島神社がある。南部の南南西約1.5km（埴田崎西方沖合約0.8km）に鹿島がある。この沖合の島が津波の来襲にあたって埴田地区に被害を与えない様に作用したものであろう。沖合の島やその周辺の海底地形なども重要な因子であり検討の対象である。

また、小目津崎の西北西約2.5kmに位置する東岩代は、1946年に“浜の船田まで運ばれる”という簡潔な記録があるのみである。

ここで東岩代の現地踏査結果にもとづき、谷筋沿いに海浜から東岩代八幡神社まで約0.5kmの地盤高の分布をFig. 3に示した。海浜（P）から神社（T）まで北東方へ0.5km位である。神社の記録では、“南北朝に遷座、津波こまで上らず”と記されている。現在、Fig. 3に示すように、砂浜を若干残して海岸堤防（G）があるが、これは昭和56年第2室戸台風災害復旧にかかるもので昭和38年3月に完成している。堤内には幅員2—3mのコンクリート平面があり通路として利用されている。その山側に竹、さらに樹令・30年とみられる松林が幅約10mで岸沿いにみられる。その山側に隣接してJR西日本の紀勢本線（上・下両線あわせて幅約10mを占有）がある。このP点とN点、さらにE点まではあぜ道などを含み盛土などによって1707年頃の地形とは異なっていると考えてよい。それより堤内地は現在は田畑で

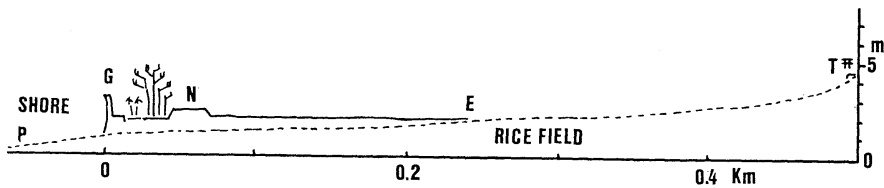


Fig. 3. A vertical cross section of Higashi-Iwashiro area.

P, shoreline facing the Pacific; G, breakwaters completed in 1962 after the 2nd Muroto typhoon in 1961; N, Kisei Rail Line of the JR Nishi-Nippon; G-N, protection works by planting bamboos and pine trees along the shoreline (the pine trees are 30 years old in 1988); N-E, soil mound for local land use; T, Higashi-Iwashiro Jinja (a shrine) build by 1400 at latest. The elevation of the ground level is about D.L. +4 m (T.P. +2.5 m).

あるが、かつては水稻耕作のための水田であったと判断される。このようなことから、1707年頃の東岩代の地盤高は Fig. 3 の破線のようなものと推察され、1707年の津波の高さも D.L. +4m (T.P. +2.5m) であったとみてよいであろう。羽鳥(1980)は田畑の被害のみを記し、東岩代の津波の高さについては何も記してはいない。

4. 結 言

1707年宝永津波により日高郡山内村全村流亡という記録に関連して、現在の南部町の測量結果・国土地理院発行の地図および南部町誌編纂委員会所蔵の史料などをもとに検討をすすめ、1707年頃の地形の推定をし、あわせて、当時の山内村および周辺地域の津波について考察した。本文では、羽鳥(1980)の記述にない部分および現在の状況に焦点をしばって検討した。

謝 辞

本文をまとめるにあたり、史料収集・測量結果の利用など、建設省国土地理院、田辺市立図書館、和歌山県日高郡南部町役場工務課、南部町誌編纂委員会、その他多数の方々の御協力により貴重な情報の提供を得た。

文 献

浜野大吉(1962): 埴田区誌, 埴田区. 444pp.

- 羽鳥徳太郎(1980): 大阪府・和歌山県沿岸における宝永・安政南海道津波の調査. 東京大学地震研究所報, **55** (22), 505-535.
- 日高郡役所(1923): 和歌山県日高郡誌(森彦太郎編). 1694pp. (とくに p. 412).
- 日高郡役所(1970): 日高郡誌上(復刻版). 名著出版株式会社. 821pp. (とくに p. 409-428).
- 中村重久(1984a): 津波の古記録とその意義について. うみ, **22**, 69-72.
- 中村重久(1984b): 田辺・白浜における津波について. 京都大学防災研究所年報(27B-2), 591-610.
- 中村重久(1985): 和歌山県日高川の津波史料について. うみ, **23**, 26-31.
- 中村重久(1986): 巨大津波の前駆異常音について. うみ, **24**, 48-52.
- 中村重久(1987a): 和歌山沿岸の最大津波潮上高について. うみ, **25**, 147-150.
- 中村重久(1987b): 北太平洋西部の印南沿岸(和歌山県)における津波. うみ, **25**, 190-192.
- NAKAMURA, S. (1987): Possible subsurface of an acoustic tsunami precursor. J. Oceanogr. Soc. Japan, **43**, 228-236.
- 中村重久(1988a): インドネシア沖の地震による津波前駆音の推定と対用について. 東南アジア研究, **26**, 75-85.
- 中村重久(1988b): 1854年巨大津波源域至近距離の下田原浦で死者ゼロ. うみ, **26**, 164-169.
- 田山 実(編)(1904): 大日本地震史料. 震災予防調査会報告. No. 46, 甲, 乙, 1-606, 1-590.